

一般社団法人日本摂食障害協会



理事長
鈴木 眞理

東京都

摂食障害は、拒食症（神経性やせ症）、過食症（神経性過食症）、過食性障害に大別され、生物学的・心理社会的要因が複雑に絡み合って発症する。主に思春期から青年期女性の心身症で、1980年代から患者数が増加している。欧米には摂食障害だけを包括的に診療するセンターがあるが、日本にはそのような施設はなく、日本摂食障害学会の有志が公的な治療施設の設立を目指して2010年に日本摂食障害協会の前身「摂食障害センター設立準備委員会」を発足、2014年、4つの治療支援センターが稼働、2016年、一般社団法人日本摂食障害協会となる。医師、心理士、栄養士等専門職のメンバーたちが、自助グループや家族会と連携して当事者や家族などの支援者へ情報提供、治療者の育成支援、啓発・予防活動、調査研究を行っている。

摂食障害は、1つの原因を取り除いて治すような治療ではなく、食生活、生活習慣、体と心を総合的にサポートし、医療機関のほかに自助グループや家族会など、人の力を借りて味方を増やすことが大切。子どもや女性の食と健康に関する正しい情報提供に力を入れている。

（推薦者：NABA（日本アノレキシア・プリミア協会））

第55回社会貢献者表彰「日本財団賞」を受賞して

このたび、歴史ある賞を頂戴し、感謝の気持ちは言葉で尽くせません。安倍昭恵会長をはじめ選考委員や役員の皆様のご尽力にお礼申し上げます。この賞は、初代理事長の生野照子をはじめ多くの先達と仲間へ頂戴したと認識しています。

やせることでストレスを回避しようとする拒食症、むちゃ食いや嘔吐でストレスを発散している過食症は若い女性に多い病気で、日本でも1980年代から急速に増加して、有病率はこれらの病気の先進国である米国と同等です。拒食症は成長障害、骨粗鬆症、無月経や不妊症などの合併症があり、精神疾患の中で最も高い死亡率を有するので、心身両面からの治療が必要です。欧米では、若年者の重要な疾患と認知されて、摂食障害センターが設立され、成果を上げています。ところが、日本には1か所もなく、摂食障害を診療できる施設も少ないので、ご家族は診療可能施設に辿り着くことから始める状況でした。

2010年に日本摂食障害学会の私ども有志が、「摂食障害センター設立準備委員会」を設立して、講演会、署名運動、厚生労働省や国会議員への陳情を行い、2014年に念願の厚労省の摂食障害治療支援センター設置運営事業が開始されました。そこで、「摂食障害協会」と名称を変え、約50名の専門職集団として、当事者・家族、心理士・栄養士・歯科医、薬剤師、学校関係者、食品関連業界、マスメディアなどを対象に講習会を16都市30回以上開催して啓発活動を行い、無料メール相談、ガイドブックなどの刊行を行ってきました。また、調査研究を行い、「母子関係が原因」「わざと拒食や過食をしている」などの誤解があること、新型コロナウイルス感染症後に当事者の約8



割が悪影響を受けていることを明らかにしました。6月2日はメディアを活用して国境を越えて団結して啓発と支援を行う摂食障害世界アクションデイです。当協会はこの活動に第1回から参加し、40以上の省庁や学会の後援を頂戴して講演会、映画上映会、当事者の「私たちの主張」などイベントを開催しています。さらに、経済的に発展すると肥満率が高くなるという世界的潮流に逆行する日本女性のやせ過ぎと健康被害、アスリートの摂食障害、やせ礼賛の文化があるマスメディアへの啓発活動にも力を入れています。キャッチフレーズは「食べる喜びを取り戻そう」です。

授賞式で、他の個人・団体様が人命救助、地域貢献、文化継承、武装解除など様々な場所でご苦労されながら活動されており、尊敬の念を禁じえません。心からエールを送らせていただきます。私どももこの受賞を励みに、さらに尽力してまいります。

一般社団法人日本摂食障害協会 理事長

政策研究大学院大学名誉教授

跡見学園女子大学 心理学部 臨床心理学科 特任教授 鈴木 眞理



▲ゲートキーパー向け講習会（大阪）



▲専門家向け講習会（名古屋）



▲当事者向け講習会（東京）



▲アスリート トレーナー向け講習会（東京）



▲アクションデイ2019 質疑応答



▲アクションデイ 全体

特例認定 NPO 法人とりで



理事長
金本 秀韓

山口県

NPO 法人とりでは、①児童自立生活援助事業（2か所 広島県大竹市、山口県岩国市）②小規模住居型児童養育事業 ③子育て支援短期利用事業・夜間養育事業 ④退所児童等アフターケア ⑤子どもの貧困対策 ⑥放課後等デイサービス ⑦スクールソーシャルワーカー活用事業 ⑧成年後見人の8つの事業を行っている。2016年3月に若者の自立を手助けするため、団体を設立。翌月に山口県で初の女子専門の自立援助ホーム「そなえ」の運営を開始した。施設退所の女子だけでなく、家庭に居場所がない子等、入所や利用を希望する子どもへのアプローチを、関係機関と連携しながら、時にはFacebookやLINEを使って行っている。また、子どもの居場所作り事業では、学校長の理解を得て、校内等で、小学生に向けて塾や子ども食堂、朝食のサービスも行っている。

（推薦者：広島県西部こども家庭センター 所長 内山 偉文）

この度は、社会貢献者表彰を頂きありがとうございます。大変励みになりました。私たちは平成28年4月から地域の子どもたちに対し無料の食事支援（こども食堂）や学習支援を通じた子育て支援、子どもの貧困対策と、虐待などが理由で、家庭で暮らせなくなった子どもたちを保護し親代わりとして自立支援をする自立援助ホームの運営を中心に取り組んできました。

法人を設立した動機は、理事長の金本秀韓が以前働いていた社会福祉法人（児童養護施設、児童家庭支援センター）において、さまざまな理由により家庭で暮らせない子どもたちの保護の必要性を感じる一方、地域の保護者や子どもたち自身から相談を受ける中で、地域の中にも大変な状況に置かれている子どもたちがいることに気付いたことがきっかけです。そこで感じた気づきから、「誰でも子どもを育てやすい、どんな子どもも育ちやすい地域を作ろう」「地域に支援を行う機能、子どもを保護する機能を持った団体を作ろう」と決意し、平成28年に当法人を設立しました。

具体的な活動として、「子どもの貧困対策」「子どもの居場所づくり」として、こども食堂（昼食提供）とモーニング（朝食提供）、宅食（購入弁当配布）、地域の子どもへの学習支援があります。

学習支援は地域の子どもが誰でも参加可能なものとは別に岩国市から事業委託を受け、生活困窮世帯の子どもを対象とした学習支援を平成30年度より開始しました。学習支援が子どもの学力向上や、学習習慣の定着のきっかけになれば、生活困窮世帯の子どもの学力や進学率の向上につながり、将来的な「貧困の連鎖」を断ち切る要因に成り得ると期待しています。

また、活動を通して知った子どもへの養育が気になるひとり親家庭等に対して、各

関係機関につなぎ直接的な支援を行った事例もあり、「支援が必要だが外からは見えにくい家庭」への支援を広げていけると考えています。

さらに、子どもが家庭での生活が困難な場合、子どもを保護する機能として「自立援助ホーム」「ファミリーホーム」の運営と「子育て支援短期利用事業」を行っています。

その他に、自立援助ホーム等、児童入所施設を退所した児童を対象に『退所児童等アフターケア事業』も自主事業として行っており、退所児童の相談支援を行い、再就労に繋げた実績もあります。

以上のような活動を行うことで、子どもたちに「将来に対しての夢や希望」をもってもらい、保護者を支えることで、法人の理念である「地域が子育てを支える」を実現したいと思います。

理事長 金本 秀韓



▲とりで塾で子どもたちに学習支援するスタッフ



▲自立援助ホームそなえで入居している子どもたちの調理の練習を見守るスタッフ



▲とりで塾で子どもたちと卓球をするボランティアスタッフ



▲とりで塾で子どもたちと風船で遊ぶボランティアスタッフ



▲とりでこども食堂で子どもたちと食事を食べる金本理事長

根津 さゆり



京都府

根津さんは20歳の頃にのら猫を保護したことがきっかけで、保健所の殺処分方法を知り心を痛めた。その後、不幸なのら猫を減らしたいと1980年から40年に亘ってのら猫を捕獲して不妊手術を行い里親探しを行う活動と、飼猫の多頭飼育崩壊を防ぐための早期不妊手術実施の啓発活動が続いている。京都市議会に不妊手術助成金制度を請願し可決させたが、十分とは言えず、活動趣旨に賛同してくれた獣医師とボランティアの協力により、毎月数日間の手術日を決めて短期集中で大量に捕獲されたのら猫や保護猫の不妊手術をしている。その数は1年間で2,500~3,000匹、25年間で60,000匹にも及んでいる。短時間での日帰り手術が可能のため、他府県からの利用者も多い。不妊去勢時に検査や駆虫、ワクチン等済ませ、譲渡会で飼猫となることを目標としている。寄付は殆ど無く、費用の大半は個人負担している。プリーダーの規制や生体販売等の問題提起を行い、様々な猫の現状をSNSで発信し不幸な猫を1匹でも減らしていきたいと、自身も2年前に発症した難病を抱えながら、犬猫のことを第一に考え、動物認定看護師として献身的で意欲的な活動を続けている。

(推薦者：公益財団法人どうぶつ基金)

子どもの頃から犬猫に囲まれて育ちながらも産まれたばかりの子犬、子猫を処分する大人たちに泣いて訴えることしかできなかった悔しい思いがありました。

痩せたのらの母猫が子猫を育てている風景はとても癒しとは程遠く、辛いものでしかありませんでした。

40年前、進学と同時に学生結婚して親から独立してからは、のら猫を不妊手術して子猫を譲渡することを始めました。不幸を繰り返さないためにも子猫の不妊去勢が済むまでは所有権は譲りませんでした。ただ学生の身では手術代は高額すぎて月に1~2頭が限度でした。

周りに理解者も協力者も情報もなく、行政や獣医師会への交渉も試行錯誤で、孤独な活動時期でした。一時的でしたが大きな団体に所属することにより、自分のやるべき目標を見つけてからは活動を具体的に加速することができました。

不幸な犬猫を減らすためには、早期で低料金の不妊去勢手術を広めることが最短で最大の方法です。まず、京都市へ請願し、助成金制度を確立させました。幸いにも協力的な獣医師との出会いにより、低料金の不妊去勢手術を毎月開催することを実現でき、25年目の今も続けることができています。40年間の経験と知識、25年間で得たノウハウは、SNSで全国の活動者へ情報発信し、参考にしてもらっていると確信しています。

社会の片隅でひっそりと生きる小さな命を守るという長く地味な活動が認められ、表彰していただいたことは大きな驚きと同時に大変な喜びでした。また、私一人の力ではありません。25年間、6万頭を超える手術を執刀していただいた獣医師、毎回休



まず手伝ってくれたスタッフ、活動仲間のボランティアの皆さんのおかげです。

2年半前に難病を発症しましたが、不幸な犬猫をゼロにできるよう、可能な限り活動を続けていきたいと思っています。

お心使いの詰まった盛大な表彰式は驚きと感動でした。推薦者及び選考委員、財団の皆様、心から感謝申し上げます。



▲ボランティアが作ってくれたお気に入りのポスター



▲2019年12月 1日2人の獣医で100匹を超える手術を行うことも



▲2011年3月19日 高松市 犬多頭飼育崩壊現場 山口獣医師と不妊手術



▲不妊去勢以外の緊急手術 手術の助手を務める



▲不妊去勢以外の緊急手術 手術の助手を務め中



▲ぜろの会 正面

風疹をなくそうの会 『hand in hand』



代表
可児 佳代



副代表
西村 麻依子



役員
大畑 茂子

岐阜県

妊娠の初期に風疹に罹患すると先天性風疹症候群（CRS）という眼や耳、心臓にハンディキャップをもった子どもが生まれて来る可能性につながる。そこで CRS と診断された子どもの保護者等が10人程で2013年8月に「風疹をなくそうの会」を結成した。わが国では、1994年に予防接種法の改正で、男女へのワクチンの定期接種が義務づけられ、しかも2回接種が一般的で、接種者の99%で感染予防が可能とされている。しかし、この中で女性のみが定期接種の対象であった頃の30代から50代前半の男性は風疹の抗体保有率が低く、この年代の成人男性を中心に風疹の全国的な流行が繰り返されている状況であった。このことから会では30代から50代前半の男性に向けての予防啓発活動とワクチン接種による風疹の排除を国（厚生労働省）に数えきれないほどの働きかけを行い、ようやく2019年から、3年間の時限措置で、この層の男性を対象に、抗体の有無の検査費用と抗体が十分でなかった場合のワクチン接種の費用を負担する対策を、自治体を通じて実施することを発表した。会では、このような風疹の国内流行を止める活動とともに、風疹予防のための学習や啓発活動、CRS 児への支援活動、学会への発表等の活動を続けている。

（推薦者：国立感染症研究所 感染症疫学センター 第三室（予防接種室） 室長 多屋 馨子）

この度、公益財団法人社会貢献支援財団より、第55回社会貢献者表彰を頂き有難うございます。

授賞式では様々な分野で社会貢献されている皆様にお会いでき学ばせていただきました。このような晴れがましい場所が無縁の私たちには勿体無いほどの場ではありましたが、これからも風疹ゼロを目指して頑張ろうと思いました。

私たちは、2013年から風疹の予防接種についての啓発活動をしている任意団体です。子どもが先天性風疹症候群と診断された母親と成人した当事者が、風疹が日本から排除され二度と流行らないよう活動しています。

先天性風疹症候群とは、妊娠初期に風疹に免疫のない妊婦が感染することにより胎児にも感染し、障がいを持ったお子さんが生まれる可能性が高くなるという病気です。妊娠中に風疹に罹ると産院にて出産を諦めるように言われることが多いです。

2012年からの流行では、45人の先天性風疹症候群のお子さんが生まれました。2013年より啓発を行ってきましたが、残念ながら2018年から再流行が起り、5人の先天性風疹症候群のお子さんが生まれています。

風疹流行の中心は、40代から50代の働き盛りの男性です。国の政策でこれまで風疹

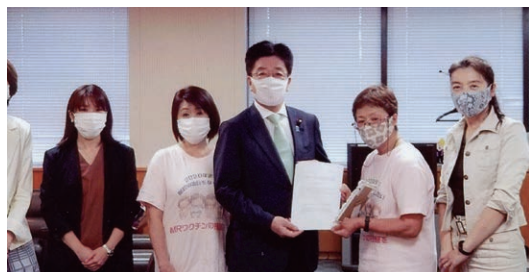
のワクチン接種をする機会がありませんでした。この世代への具体的なワクチン接種の機会を求め、会の発足当初から国に要望書を提出したり、懇談を重ねたりしてきました。そして2019年、遂に国が3年間限定で無料で抗体検査とワクチン接種ができるクーポン券を送付する決定をしました。しかし2021年現在、このクーポン券の使用率は非常に低いです。そのため、会としては「3年間限定」という縛りをなくし、風疹抗体保有率が90%を超えるまで対象者にアプローチできるよう活動を続けています。

先日の受賞式に参加されていた皆さまの中にも、対象年齢の男性が多数出席されていたように思います。風疹の抗体検査やワクチン接種への意識は流行時には高まりますが、流行が落ち着いており、かつ、コロナ禍の今は足が遠のく気持ちも分かります。しかし、今がチャンスでもあります。どうか、クーポン券の使用を周りの皆さまにお伝え下さい。

おひとりおひとりの力で大きな前進ができます。

私たちが引き続き声をあげて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

代表 可児 佳代



▲2020年8月
加藤信勝厚生労働大臣に第5期定期接種の延長の要請



▲2020年2月4日 風疹の日
“風疹ゼロ”プロジェクトのイベントに参加



▲2019年10月
ワクチンパレードに参加



▲2019年10月
ワクチンパレード後、加藤信勝厚生労働大臣へ要請



▲2019年1月「遙かなる甲子園」
クラウドファンディングにて資金を集めて関西芸術座による上演を大阪・東京で実現



▲2018年11月
小泉進次郎厚生労働部会長に風疹政策の要請

増井 さち



静岡県

1994年に頸椎後縦靭帯骨化症と診断される。この病気は、背骨を構成する椎体骨の後ろの後縦靭帯と呼ばれる部位が骨化し神経を圧迫するようになる病気で、手足のしびれや、細かい動きが出来なくなったりするなど様々な神経症状が現れる。難病指定を受けており、国民全体の1.5～5.1%が本疾患にかかっているといわれているが根治的治療は見つかっていない。増井さんは自身の発症後、静岡県内で同じ病気で苦しんでいる人のための患者会を創設。「交流に勝る良薬なし」をモットーに、患者会として患者の不安を軽減するよう、相談員として患者からのメールや電話での相談に応じたり、専門の先生による医療講演会の開催や相談会、交流会を開催し、患者同士の交流を深めている。また3か月に1度の会報誌の作成も行うなど、準備会を含め24年間にわたって会の代表として活動を続け、同じ難病を抱えている人やその家族のために尽力している。

(推薦者：NPO 法人静岡県難病団体連絡協議会)

社会貢献者表彰式典にお招きいただき、誠に感無量の思いでいっぱいでした。また意外にも全国の同病者ともお目にかかれたことで、懐かしくまた、決して初対面とは思えず和やかな想いでお話しできたことに落ち着きを取り戻しました。

健康だけが取り柄の自分にとって夏も終わろうとする平成5年8月、右足に電気が走るような異変を感じました。同時に初めての事で真っ青になり、これはただ事でない?と…。

知入の紹介で整骨院を訪ね、電気、マッサージを半年くらい続けました。一向に治る気配もなく一思いに総合病院を訪ね、自分にとって何科に行ったらよいか分からず、受付を訪ね、整形外科に行くことになりました。診療にはかなり待たされました。初めての診療は緊張しました。検査も2日かかり、その結果、後縦靭帯骨化症と診断されました。この病気は希少性とあってその原因、治療薬も確定されない難病と聞いて頭が真っ白になりました。同病者も脊髄の神経圧迫で痺れ、痛みで難儀しております。厚生省研究班では日夜を徹して研究が続けられ、DNAを徐々に解明へと目指しております。

多くの患者さんの発病は60代～70代、50代には骨化ができて発症するのが60歳を超して首・肩の凝り・痺れ痛みが乗じて、特有の歩行困難、転倒などの症状が出て、やがては寝たきりということになります。またこの病気は年齢層の幅がなく80歳を過ぎると体力低下、本人は若くても親の面倒を見る、いわゆる老老介護で退会される方が目立ち、これに対応するための作業、患者交流会・医療講演・相談会等において参加者との対応は必至でした。会の活性化には自分が活動をと会を結成するのが先決と思い、難病連を訪ねましたが余り活発でなかったのか応じられず。医学書など見て患者会の存在を知ることができました。気持ちを大きくして北海道患者会に目を向けま

した。必死でした。全脊柱連会長さん（すでに他界）と会話ができ、いろいろとアドバイスを受け、本当にうれしかったです。

【地獄で仏】組織できない前、厚生省の公開講座を紹介され、会も結成することができました。今から26年前のことです。患者さんのためならば惜しまず活動を続けました。東京を中心に北海道・関東・東海・北陸・近畿・関西・等総会には体の許す限り全国患者会の皆さんと交流を深めました。お陰様で全国を旅することもできました。今年は今会結成20年にあたり、それに加え今回、東京の帝国ホテルにて、安倍昭恵会長より心のこもった輝かしい賞を受けたことは努力の賜物というほかないと信じております。

友の会は、会員のための会員により、お互い和を持って大きな輪を目指していくことを目標に活動を続けています。



▲全国患者会総会における講演会



▲全国患者総会北海道難病センターにて



▲浜医大長谷先生の講演会



▲患者共生週間作品展



▲患者交流会静岡シズウエルにて



▲講演会

瀧 香織



静岡県

骨髄増殖性腫瘍（MPN）は、血液のおおもとになる造血幹細胞に遺伝子の異常が起こり、血液の細胞（血球）が過剰に造られてしまう病気の総称。増えた細胞の種類によって分類がわかれている。最新の WHO 分類では7疾患がMPNに分類されている。瀧さんは、1999年に骨髄増殖性腫瘍のうちの1つである「本態性血小板血症」と診断された後、インターネットで他の患者と交流をしていたが、2001年から、海外の患者のメーリングリストに参加しながら、日本のメーリングリストで集まった患者同士で情報交換したり、英語の論文の要約の翻訳、病気に関する最新情報の提供、患者相談支援等を行っていた。2005年に患者同士が協力し支えあうことが重要と考え、「骨髄増殖性腫瘍患者・家族会」を設立。会員は現在130名程。地区医学顧問の医師を迎えて、勉強会、交流会を全国各地で開催したり、海外の活動にも参加し、日本での活動を紹介している。患者同士で悩みや希少疾患であることから国の指定難病への指定を目指して活動している。

（推薦者：NPO 法人静岡県難病団体連絡協議会）

この度、社会貢献支援財団より社会貢献者表彰を賜り、表彰式典にご招待頂き、心より感謝申し上げます。様々な分野で社会に貢献されている方々と共に表彰していただけたことは、大変光栄であり、他の受賞者の方たちの活動に感銘を受けました。

骨髄増殖性腫瘍（以下 MPN）は、希少疾患であることから、診断されるまでに時間がかかることがあります。私自身、該当する症状がありながら、診断されるまでに10年もかかっていました。現在は、当時と比べると、認知度も上がってきているので、そこまでかかることはないと思いますが、未だに一般の方や、専門外の医療従事者には認知度は低いです。2016年5月に「日本骨髄増殖性腫瘍の日」（Japan MPN Day）を9月第2木曜日と制定し、日本記念日協会に登録しました。以降、毎年9月に記念日イベントを開催しています。疾患の啓発と共に、MPN 患者さんに情報が届くようにという思いから制定しました。2020年12月時点で、MPN-JAPAN の医学顧問の先生を地区ごとに分けて、合計15名の先生にご協力いただいています。その担当の地域で MPN-JAPAN 主催の MPN の勉強会や交流会を開催して、疾患の理解を深め、患者・家族の会員同士で対面して交流し、一方で、会員専用のオンラインのメーリングリストでも交流しています。また、オンラインでのサポート、相談支援も行っています。

海外での活動では、2001年から2年ごとに開催されている MPN Education Foundation 主催の Patient-Doctor Conference にビデオ視聴で参加してきましたが、これまでに2回開催地である米国アリゾナ州のメイヨークリニックに赴き、実際に参加しました。最新の MPN 治療について学ぶと共に、参加している患者さんやご家族とも交流しました。2012年から数年は、米国の MPN Research Foundation 主催の



MPN Coordinator's Meeting に日本の代表として参加し、また、2016年からは、MPN Advocates Network 主催の MPN Horizons Meeting にも参加して、MPN-JAPAN の活動やプロジェクトについて紹介しました。韓国血液がん協会にも呼ばれて、韓国の MPN 患者さん向けのセミナーで、日本の患者会の活動について紹介しました。

その他に重要な活動は、国内外の製薬企業に海外で進んでいる治療薬の開発を日本で行ってもらうように要請したり、行政にもさまざまな要望をしています。

フルタイムで別の仕事をしながら、休暇を取得して、MPN-JAPAN の代表として海外のカンファレンス等に参加したり、日本国内の勉強会の準備なども大変だと思うこともありましたが、このような榮譽ある賞を頂き、頑張ってきてよかったと思いました。今後も継続して、努力していきたいと思います。この度は、ありがとうございました。

骨髓増殖性腫瘍患者・家族会 (MPN-JAPAN)
代表 瀧 香織



▲ Japan MPN Day 2017 「日本骨髓増殖性腫瘍の日 (Japan MPN Day)」のイベントで



▲ Korea picture Kaori2017



▲ MPN Horizons 2017



▲ MPN Horizons 2019



▲ Women and MPN Conference in SanDiego 2015

NPO 法人セカンドハーベスト京都



理事長
澤田 政明

京都府

安全に食べられるにも関わらず廃棄されていた食品を集め、支援を必要とする人々を支える団体等に無償で提供する活動を通して、京都における食品ロスの削減とフードセーフティネットを両立させる社会インフラのひとつとなることを目的に2015年12月に設立。企業・団体や個人から提供された食品を生活困窮者支援団体や福祉施設などへ無償で提供する「定期配送」のほか、行政や支援施設の要請で生活困窮者に食品を緊急支援する活動を行っている。また家庭で余った食品を商業施設やイベント会場に持ち寄ってもらう「フードドライブ」活動も常設型や定期開催型を併せて実施し、こども支援プロジェクトでは学校給食のない、夏休みなどの長期休暇中に就学援助需給世帯に食品を直接届けるプロジェクトも行っている。フードバンクの食品取扱量は年々増え、昨年度は40を超える団体や60名余りの個人が参加し、21トンを超える食品量を取り扱った。

現在48の団体に食品を届けているが、食品の種類のバランスなども考え、寄贈品で賄えない食品は別途寄付金で食材を購入して補い提供している。今後も福祉制度でカバーできない部分に直接ピンポイントで支援していきたい。

(推薦者：社会福祉法人宏量福祉会 野菊荘)

この度は、受賞の栄誉に預かり誠にありがとうございました。私どもにとりまして初の大きな栄誉で大変ありがたく感謝しております。

フードバンク団体としては2014年以來の受賞になるようで、私どもより先行して結成された先達の団体よりも早くに頂くことになり大変恐縮ではございます。

私どもは、京都を中心に活動するフードバンク団体です。フードバンクは未利用のまま、そのままであれば廃棄されてしまう食品などを廃棄処理にならないよう、食べ物をレスキューし、必要とする方々や支援されている団体に無償で分配します。

活動は3つの種類があります、活動の中核である「フードバンク」活動は企業や市民から寄せられた未利用の寄贈品を福祉施設や支援活動をされている団体などにお届け致します。

2つ目の「こども支援プロジェクト」は就学援助を受けている子育て世帯に学校や教育委員会からプロジェクトの案内を出し、希望される世帯に給食のなくなる長期休暇に食品を宅配便で届けるものです。

この活動をはじめたきっかけは学校の先生方とお話してるなかで、「夏休みなどの長期休暇が明けてくると、痩せてる子どもたちがいる」という話を伺ってからでした。2020年で3年目となり支援世帯も、394世帯904名の子どもたちに食品を届ける規模になってまいりました。

3つ目は、「食のセーフティーネット事業」で行政の福祉事務所や社会福祉協議会などに生活相談にこられた人に対し窓口のソーシャルワーカーが必要と考えた場合、

私どもに支援要請があり宅配便で支援食品を届けるものです。本年は新型コロナウイルスの影響で「パートで希望のシフトに入れなく収入が減った」「会社から解雇された」「再就職が難しい」と例年よりも多くの支援要請が入ってきております。

京都では「フードバンクです」と行政に電話しても「ソフトバンクは間に合ってます」と言われるほどフードバンクの知名度は低いなかではありますが、府民の中では少しずつ賛同の輪が広がりはじめています。

国内では安全に食べられるにも関わらず廃棄されてしまっている「食品ロス」が事業系、家庭系合わせて年間612万トンあり「食品ロス大国」という不名誉な冠がつけられております。その一方で生活が苦しく1日1食だけにしている方や、先述のように痩せて来る子どもたちもいます。この食の不均衡を是正し必要とされる方々に食を届けるフードセーフティを構築するためにこれからも努めてまいります。

普段人目につかない活動ですが、この度の榮譽は活動にスポットライトを当てただけだという点でも大変ありがたいものでした。ありがとうございました。

理事長 澤田 政明



▲イベント出展でフードドライブを実施した様子



▲フードバンクこども支援プロジェクトの食品を受け取った家庭からの感謝の手紙



▲フードバンク活動で食品を運んでいる様子



▲食品ロス削減のための出前授業を実施した際の様子



▲給食のない長期休暇中を支援するための食品を送付するフードバンクこども支援プロジェクトの出荷作業の様子



株式会社クラダシ



代表取締役社長
関藤 竜也

東京都

食料自給率37%のわが国の食品廃棄量が2,759万トン、その内食品ロス（返品、廃棄、規格外品等）643万トン（農林水産省、環境省、「平成28年度推計」）、これは国民1人当たり毎日茶碗1杯分のご飯を捨てているのと同じ量になるといわれる。一方、世界中の飢餓で苦しむ人への食糧として約320万トンを支援している。この問題に少しでも対応しようと株式会社クラダシは様々な理由で販路を失った食品メーカーの廃棄商品を、インターネットを活用して消費者のニーズとマッチングさせ、食品ロスの発生を削減するとともに商品の購入金額の3～5%が社会貢献団体へ寄付され、ポイントによりその活動も確認される社会貢献型のショッピングサイトを2015年に設立し運用している。

現在、会員数約10万人、協賛企業数800社、寄付された累計金額が約4,328万円。海外、環境、社会福祉、動物保護等を行っている団体が支援先になっている。2015年の国連サミットで重要なテーマとなり2019年に「食品ロス削減推進法」が施行される等、社会的な取り組みが求められるなかで株式会社クラダシは、フードロスの削減と社会貢献につながる仕組みを運用し、社会的な課題に取り組んでいる。

（推薦者：株式会社クラダシ）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団より大変名誉のある賞をいただき、心より感謝申し上げます。

クラダシは、フードロスを削減するために日本初・最大級の社会貢献型フードシェアリングプラットフォーム「KURADASHI」を運営しています。これまでの活動は、9,232トンのフードロス削減、28億6,192万円の経済効果、23.63tのCO₂削減、46,253,620円の寄付につながっています。

日本は、国内消費食料の約6割を輸入しているにも関わらず、世界有数のフードロス大国です。日本の食糧廃棄量は、年間で600万トン以上。これは、国民全員が、お茶碗1杯分のご飯を毎日捨てているのと同じ計算になります。実は、製造日から賞味期限までの期間を3等分して納品・販売期限を設ける「3分の1ルール」や、パッケージの汚れ、キズモノなどを販売しないとといった厳しい流通管理のため、賞味期限まで日数があるにも関わらず行き場をなくし廃棄となってしまう商品が多くあります。クラダシは、このような消費可能でありながら通常の流通ルートでの販売が困難な商品を買取り、「KURADASHI」で販売することでフードロスの削減に取り組んでいます。

廃棄されるはずだったものに新たな価値をつけて再流通させる、私たちはこの仕組みを「1.5次流通革命」と名付けています。通常の1次流通はサプライチェーンが構築されており、効率的かつ迅速な流通網が形成されています。食品以外の2次流通は、多くのリユースサービスが席卷し始めていますが、安全性の担保が困難なことから、食品の2次流通は存在しません。クラダシは、1次流通でも2次流通でもない、これまで流通されてこなかった本来捨てられてしまっていた商品を1.5次流通として再流



通させ、賛同メーカーより協賛価格で提供を受けた商品を最大97%OFFで販売しています。

また、「KURADASHI」の売上の一部は、エシカル消費として環境保護、災害対策、医療・福祉サービスの充実などの社会貢献団体に寄付されます。食品メーカーはフードロス・廃棄コストを削減できること、会員はお得に買い物をしながら気軽に社会貢献ができること、また社会貢献活動団体の活性化につながることで、三方良しのスキームを実現しています。

今後も、ソーシャルグッドカンパニーとして社会課題の解決を目的とした社会性、環境性、経済性に優れた活動を続けてまいります。 代表取締役社長 関藤 竜也



▲人手不足の農家と学生をマッチングする取り組みも行っています



▲種子島の町長さんから感謝状をいただきました



一般社団法人小さないのちのドア



代表
永原 郁子

兵庫県

代表理事を務める永原郁子さんは1993年に母子の健康のために神戸市北区にて「マナ助産院」を開業後、2,100人以上の赤ちゃんを取り上げながら、産後のママの育児支援も行っている。「神戸連続児童殺傷事件」等の少年犯罪や人工中絶の性の問題も多発する中で、「自分として生きることの大切さ」を伝えようと2000年には助産師仲間と「いのち語り隊」を発足し、幼稚園、小中高등학교、保護者、教職員に年間150か所余りでいのちの大切さを語っている。しかしながら、変わらず新生児遺棄事件等が起きる現実、予期せぬ妊娠に悩む妊婦のために直接的な支援が必要だと感じ、2018年9月に24時間相談でき、来所も可能な「小さないのちのドア」を助産院の一室に併設した。

開所以降2年が経ち、約1万件、千人程の相談があり、その中には妊娠後期で病院未受診の女性からの相談も100件ほどあった。一方で民間団体と連携し、36人の赤ちゃんに「特別養子縁組」によって新しい家族が誕生した。この活動を通じて、相談だけではなく、居場所のない妊婦に出会い、継続的な支援の必要性を感じ、5人ほどの入居が可能な安全で安心できる「マタニティホーム」を助産院の隣に建設。2017年度の厚生労働省の発表によるとゼロ歳児の虐待による死亡数が66人とあり、その全員が病院未受診である。その母親を非難することは易いが、そうならない仕組みを考え、女性と赤ちゃんを救う活動を続けている。

(推薦者：公益社団法人家庭養護促進協会 橋本 明)

この度は私共の働きに目をとめていただき表彰を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。

どんなに気丈な女性でも妊娠、出産、産後の子育てを一人で乗り越えることはできません。にもかかわらず、小さないのちのドアの相談の中には、パートナーや実家に頼ることができず、孤立して途方に暮れている妊婦さんからの相談が少なくありません。妊娠したことで職を失い、住む所も失ってしまった妊婦さんにも多く出会ってきました。2020年5月頃からは新型コロナウイルス感染拡大の影響で職を失ったという妊婦さんからの相談が増えております。

友だちに頼るにも限界がありますし、行政に相談に行っても「産んでから来てください」と言われます。日本には妊婦の生活支援に特化した制度がありません。

小さないのちのドアでは開所以来、賃貸住宅やマナ助産院に滞在していただいてそのような妊婦さんのお世話をさせていただいてきました。妊娠に気づかず、妊娠後期になってしまっていた方や、中絶を迷っていた方、若年妊婦さんなど様々な事情を抱えた方が、私たちがサポートをさせていただくことで、無事妊娠出産を乗り越えて、笑顔で新たな出発をされます。

このような働きをさせていただく中で私たちが気付いたことがあります。それは頼る人がいない、住む所がないと言った状況はそれ自体大変なことなのですが、もっと大変なことは、そこに至るまでにどれほどの傷を負い、裏切られ、愛されることが少

なかったかということです。相談される多くの方は悲しく、苦痛の成育歴を持っておられます。ですから頼る人がいない孤立した妊婦さんのサポートはただ衣食住を満たすだけはいけないのです。妊娠という自分の力ではどうすることもできない時だからこそ、人の温かさに触れてほしいのです。

2020年12月に完成したマタニティホーム「Musubi」はまさに妊婦さんが愛に包まれる場所であり、人生の中でも一番つらい時に訪れる場所かもしれません。しかしその人生で一番つらい時が幸せの人生へのターニングポイントとなるほどのよい経験となる場所にしていただきたいと願っています。

今回の受賞を励みに致しまして、これからも困難な状況にある妊婦、そして胎児や乳児のために精一杯努めて参ります。

代表 永原 郁子



▲ドア入口



▲マタニティホーム外観



▲命の教室、幼稚園での公演



▲開所式



▲小さいのちのドアの電話相談は24時間365日体制



▲妊婦健診の様子。エコーで赤ちゃんの状態を確認。

ほうき民話の会



鳥取県

鳥取県西部地域を主体に、伝承の民話を次世代へ語り継ごうと、2002年に結成された。50代から90代で構成される18名の会員が、隔月で再話の勉強会と公開で民話を語る「民話のへや」を、図書館と歴史館で開催している。また、小学校の朝読書で語り、民話のおもしろさや、想像力を膨らませる楽しさを伝えている。他にも地元で行われる数々のイベントに年15回程出向いて披露している。

語られる民話は、書物にかかれた書き言葉を、語り口調に直す「再話」といわれる作業で、完成させる。地元の言葉で語る民話は、どこか懐かしく聴く人の心をほっこりとさせる。中海テレビの市民チャンネルで一日中放送され、人々に広く親しまれている。

(推薦者：小林 龍雄)

副会長

角 和代

第55回社会貢献者表彰を頂き心からお礼申し上げます。

晴れやかな中にも落ちついた雰囲気の中で志し高い方々とお会い出来たことを本当に嬉しく思い、また改めて社会貢献の意義を感じました。

会場で「Paxi²」(ペペ)さんと再会できました点も嬉しいことでした。志が同じ方向を向いていると意外なところで出会うチャンスがあることを思いました。最後に歌声を聞けてよかった。

また、私事ですが、孫も参加してくれました(大学生1年と3年)。今は勉強中なので日頃と違う場でできる数少ない経験になると思ったのです。今年はコロナ禍でスタッフの方々は大変だったと思います。お礼を言いたいです。

孫たちも大学の入学式が中止となり、上期はほとんど学校へ行けず授業はオンライン、レポート提出、10月になってやっと大学に行くことができた。これも経験とこれから頑張ってくれるものと思います。

ほうき民話の会

活動の一部

私たちは2002年5月に会を立ち上げたのですが、それまでは各自が小学校、幼稚園などに出かけて毎月例会を続けていました。米子地区に残っている民話を本にまとめてくださった先生の本(米子民話散歩)(中海の怪談)、勉強会をもち、そこで話しを聞いたりと体感を重ねました。夏休みにはバス一台で現地に行き、その前にゴザを敷きそこで一話。またバスで移動して一話と語り、中海の怪談では、中海一周(10時間かけて)民話をひろい、山にも登り、海を眺め、話を聞き、紙芝居を見、これ等よい体験でそれを子どもたちに伝え、一昨年は大山寺開山1300年祭があり、枕木山から大山寺への美保湾を思いながら、出雲からの繋がりを改めて思います。 角 和代



▲とりアート 鳥取県総合芸術文化祭 とりぎん文化会館



▲親子で楽しむ民話の夕べ 米子市旧市庁舎



▲国民文化祭 岡山2010



▲庚申侍



▲定例会の様子



▲民話のへや



▲民話のつどい in 米子 佐治谷ばなしあれこれ (主催ほうぎ民話の会)

田中 ルーデス 千江美



静岡県

日系3世の田中ルーデス千江美さんは、自身の体験から「言葉が分からず不安な人を助けたい」との思いで、四半世紀にわたり病気になった外国人患者と医師の通訳をしている。

静岡県浜松市は、楽器メーカーや自動車メーカー等の工業が盛んで、在住外国人労働者が多く、中でもブラジル人の多い都市である。在住外国人が体調を崩し、医師の診察を受けるには「言葉の壁」が立ち上がる。田中さんも来日時は日本語の挨拶しか話せず、病気になったときに非常に苦労し、悔しい思いをした経験がある。自分と同じような苦労をしてほしくないとの思いから、困っている在住外国人のために専門性の高い医療通訳をしている。

昼夜を問わず田中さんの携帯電話が鳴る。相談者から細かく話を聞いたうえで、病院や診療所へ送迎し、付き添って通訳する。不安に思う人たちは長年にわたり手助けしている。病院内だけの医療通訳をする人はいるが、個人的な相談や裁判所、警察署、刑務所などに通訳を兼ねて同行することもあり、多くの在住外国人を支えている。

私がこれまで歩んできた道は、「間違っていない」「意味があることだ」と報われた気持ちでいっぱいになりました。このような賞を頂くと、夢にも思っておりませんでした。荣誉ある賞を頂き、まことに光栄に存じます。

振り返れば、日本に初めて来たのは30年ほど前のことです。仕事を探しに来日し、浜松のカセットテープの組み立て工場で働きました。日本語が分からず、言葉の壁にぶつかる日々でしたが、2人目の子ども授かったとき、大きな壁に直面しました。産婦人科で何を言われているかまったく分からず、途方に暮れてしまったのです。それからは、辞書を引いて日本語を猛勉強する日々になりました。無事に出産を終えると、「病院に付き添ってほしい」と日本語が分からない同胞のブラジル人から頼まれるようになりました。それから、総合病院や診療所に付き添い、通訳を務めるようになり、25年ほどがたちます。

困っている人を助けたい、という気持ちだけで続けてきました。頼ってくれるブラジル人は、日本語が十分に分かりません。医療の現場では、言葉が分からないことは命に関わる問題です。であれば、自分にできることがあるなら、やるべきことをやる。その一心で彼ら彼女たちの助けを求める声に応えてきたつもりです。「無理」とか「できない」という言葉は、私は使わないようにしています。とにかくやる。それが大事だと考えています。

「努力は、きっと誰かが見てくれている」。母が常々、口にしていた言葉です。その言葉を、私はかみしめています。人生で、賞状をもらうのは初めての経験です。本当にうれしく思います。医療通訳は、命に関わる仕事です。常に正確な情報が求められるため、日々、勉強の毎日です。これにおごらず、努力を重ねていきたいです。

かつて、ブラジルに渡った私の祖父は、内科医でした。戦前に熊本県から海を渡り、コーヒー農園で働きながら、体調不良に悩む日本人の相談に乗っていたと、母から聞きました。私にも同じ血が通っているのだとしみじみと思います。不思議な運命です。

このたびは、本当にありがとうございました。 田中 ルーデス 千江美



▲医師の話を患者に通訳する様子



▲ブラジル人を優先的に診療する時間を設けたクリニックの川島院長と



▲診療中の患者さんに通訳する様子



▲出産前の妊婦さんの通訳兼付添い同行



▲出産直後、赤ちゃんとお母さんに付添い

NPO 法人 Accept International



代表理事

永井 陽右

東京都

ソマリアなどの紛争地で、テロと紛争の解決をめざし、いわゆるギャングやテロリストなどの暴力的過激主義者が武器を捨て、社会に戻るための支援をしている日本で唯一の団体。

代表理事を務める永井陽右さんは、2011年、早稲田大学1年時にアフリカを訪れながら世界の人道危機を調べるうちに、ソマリアが飢饉と紛争で「想像もできない比類なき人類の悲劇」に陥っていると知り行動を開始。同年9月に日本ソマリア青年機構を設立、2013年からは永井さんと同世代のソマリア人ギャングたちとの対話の場を作り、彼らを脱過激化して社会復帰させる事業を開始した。活動を続ける中で、ソマリアだけではなく世界のテロと紛争の解決に尽力しようと決め、2017年にNPO法人 Accept International に改称し、いわゆるテロ組織の投降兵や逮捕者を対象に、現地の刑務所や投降兵キャンプなどで彼らの脱過激化と社会復帰に取り組むようになった。

現在、ソマリア、ケニア、インドネシアの3か国で主に活動しており、これまでに間接支援を含め投降兵320名、逮捕者750名、ギャング151名の受け入れ、ギャング組織1つの解散、約1,500名の若者の過激化防止支援などの成果を上げている。

(推薦者：秋葉 光恵)

この度は、社会貢献者表彰の栄えある受賞に授かり、ご推薦とご選考をいただいた方々をはじめ、これまでの活動を支えていただきました皆様にあらためて感謝申し上げます。受賞式に出席しまして、人命救助、貧困児童、難病、環境問題、ストーカー依存のケアなど国内外の様々な分野で社会貢献されている方々の活動を知り、大変感銘を受けました。

私たちアクセプト・インターナショナルはソマリアなどの紛争地で、テロリストやギャングの方々を受け入れるとともに、彼らの社会復帰支援を通じてテロ・紛争問題の解決に向けて活動を行っている NPO 法人です。SDGs では主にゴール16「平和と公正をすべての人に」の実現を目指して、国連とも協働で事業を実施しております。活動の軸としましては、テロ組織への新規の加入者を減らすとともに、テロ組織を抜け出す人を増やすことで、問題の根本的な解決を目指しています。

例えば東アフリカに位置し、世界一危険な国・比類なき人類の悲劇と呼ばれるソマリアの首都モガディシュにおいては、テロ組織からの投降兵や逮捕者の方々のリハビリテーション施設、刑務所にて、中立の立場で個々人の希望や展望に焦点を当てたケアカウンセリングや、身元引受人との調整、双方向的宗教再教育などを通じて、彼らの脱過激化を実施しております。この取り組みは2017年より継続的に実施しており、2020年11月時点では、アフリカで最も危険なテロ組織とも呼ばれるアル・シャバーブの投降兵89名、逮捕者88名を受け入れ、彼らの脱過激化と社会復帰を実現しました。

また、刑務所内のみならず、現役でテロ組織に所属する人々に対しても、組織から

の脱退を促進するべく、投降を呼びかけるリーフレットを制作し、紛争がアクティブな地域を中心に、現地の軍と連携したこれらの配布と投降促進のオペレーションを戦略的に実施しております。こちらも2020年9月より試験的に開始しており、2020年12月末時点では、アル・シャバーブから計115名の投降が実現しました。

当法人は2011年より学生団体から発足し、様々な困難の中で多くの方々に支えられここまでできました。そのため、この場をお借りしてこれまで多大なるご協力を賜りました全ての方々に心より感謝申し上げます。

まだまだテロと紛争のない社会の実現には多くの問題が山積みではありますが、今回の受賞を励みに、これからも活動に尽力して参りたいと思います。ありがとうございました。

代表理事 永井 陽右



▲ソマリアの刑務所にて、テロ組織にいた方々のカウンセリングや対話セッション



▲受け入れ者への職業訓練の一つであるスマートフォンの修理研修の風景



▲インドネシアにて、テロ組織にいて刑務所で服役したのち釈放された直後の方々に対して、社会側の代表者なども招聘しての和解セッション



▲元ギャングの青年たちへの就労支援カウンセリング



▲刑務所にいる間から支援していた元海賊の青年の家庭訪問

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年/回										小計
	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野	年/回										小計
	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野	年/回								小計	受賞者 合計	
	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10			
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	3930	
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	91	
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	1626	
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	2385	
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	270	
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	364	
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	1134	
その他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	1658	
小計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	11458	
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

分野	年／回									小計	受賞者 合計
	29回 平11	30回 12	31回 13	32回 14	33回 15	34回 16	35回 17	36回 18			
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2		41	
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18		105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)		4	7	8	8	11	9	9		56	
(国際協力)			2	1	3	3	4	2		15	
(ハッピーファミリー)		2	2	1	0	2	0	0		7	
(21世紀若者)		0	0	2	1	3	1	2		9	
		2	3	4	4	3	4	5		25	
こども読書推進賞					3	3	3	3		12	
小計	20	24	24	28	29	29	28	32		214	11672
開催日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20			
式典会場	④	①	④東京全日空ホテル								

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度よりこども読書推進賞を新設。

分野	年／回										小計	受賞者 合計
	37回 平19	38回 20	39回 21	40回 22	41回 23	42回 24	43回 25	44回 26	45回 27			
人命救助の功績	9	13	11	11	8		3	9	0		64	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		36	35	47		293	
特定分野の功績 (海の貢献賞)	1	2	3	5	2		2	0	0		15	
海への貢献の功績								3	2		5	
こども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門バストラル	1										1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル						128	12				140	
小計	44	50	48	50	49	128	53	47	49		518	12190
開催日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30			
式典会場	④ ANA インターコンチ ネンタルホテル					⑤帝国ホテル						
												12190

平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

分野	年／回										小計	受賞者 合計
	46回 平28	47回 28	48回 29	49回 29	50回 30	51回 30	52回 令1	53回 1	54回 2			
人命救助の功績	9		11		11	8	4	3			46	46
社会貢献の功績	11	51	17	53	29	32	33	37	39		302	302
小計												348
開催日	7/1	11/28	7/21	11/27	7/6	11/26	7/22	11/25	8/24			
式典会場	⑤帝国ホテル											
												12538

平成28年度より年に2回式典を開催。

資 料

分野	年／回	55回								小計	受賞者 合計
		令2									
人命救助の功績										46	46
社会貢献の功績		41								343	343
小計											
開催日		11/30									
式典会場		⑤ 帝国 ホテル									
											12579

都道府県別受賞者内訳

県名	第54回 までの累計	第55回 受賞者	受賞者数
北海道	665		665
青森県	180	1	181
岩手県	216		216
宮城県	397	1	398
秋田県	125		125
山形県	156	1	157
福島県	179	2	181
茨城県	202		202
栃木県	150	1	151
群馬県	244		244
埼玉県	475	2	477
千葉県	404		404
東京都	1,192	9	1201
神奈川県	636		636
新潟県	263	1	264
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	135	1	136
長野県	201	1	202
岐阜県	217	1	218
静岡県	317	3	320
愛知県	319	2	321
三重県	164		164
滋賀県	101		101

県名	第54回 までの累計	第55回 受賞者	受賞者数
京都府	216	3	219
大阪府	502		502
兵庫県	524	1	525
奈良県	114		114
和歌山県	144		144
鳥取県	94		94
島根県	111	1	112
岡山県	310		310
広島県	418	1	419
山口県	273	2	275
徳島県	177		177
香川県	196		196
愛媛県	150		150
高知県	75		75
福岡県	554	1	555
佐賀県	134		134
長崎県	269		269
熊本県	233		233
大分県	127	2	129
宮崎県	74	1	75
鹿児島県	142	1	143
沖縄県	169	1	170
その他	102	1	103
合計	12,538	41	12,579

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計として
足した数。

役員・評議員一覧

会 長	安 倍 昭 恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副 会 長	内 館 牧 子	脚本家、東北大学相撲部総監督
理 事	浅 野 加寿子	放送評論家、プロデューサー NHK 会友
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理 事	犬 丸 徹 郎	ベルナルドジャパン株式会社 副会長
理 事	増 岡 聡一郎	株式会社 鉄鋼ビルディング 専務取締役 COO
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	中 村 元 彦	中村公認会計士事務所 所長
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社 石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	井 沢 元 彦	作家
評 議 員	ロバート キャンベル	国文学研究資料館 館長
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役相談役
評 議 員	徳 永 洋 子	ファンドレイジング・ラボ 代表
評 議 員	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役

(五十音順)

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<https://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2021年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION